

# 全長短縮の意義検討

## 有識者会議部会が会合



東北誘致

【東京支社】国際リニアコライダー(ILC)の計画見直しを巡り、文部科学省の有識者会議が再設置し

た素粒子原子核物理作業部会の第1回会合は18日、同省で開かれた。委員11人が出席。国際将来加速器委員会(ICFA)が昨年11月、初期整備延長を31キロから20キロに短縮する計画を承認し、その科学的

意義について検討した。高エネルギー加速器研究機構(KEK、茨城県つくば市)の藤井恵介教授は欧州合同原子核研究所(CERN、スイス)の大型円形加速器の状況を説明。「新粒子の兆候が見られず、ILCによるヒッグス粒子の精密測定は素粒子物理学の進路を示す重要なものだと強調した。

作業部会は2014～15年に計8回開催。ILCの計画変更を受けて技術設計報告書検証作業部会とともに再設置された。座長の中野貴志大阪大核物理研究センター長は「ILCで取り組むべき研究とその物理的意義について、一般の人たちにも提示できるよう議論を進めたい」と語った。